

美術科学習指導案

日 時 平成27年 6月 4日 (木)
公開授業Ⅱ
学 級 岩手大学教育学部附属中学校
1年D組 39名
会 場 美術室
授業者 高橋 知志

1 題材名 風景写生画の制作～木の〇〇を表現しよう～ (A表現：水彩による風景画の制作)

2 題材について

(1) 生徒観

これまでガイダンスを含めて4時間程度の授業を行っている。始めに、美術に関する実態把握を兼ねて、鉛筆の削り方や簡単な描画の取り組みを行ったが、小刀やカッターなどで鉛筆を削った経験のある生徒はほとんどいなかった。削ったことのある生徒でも、「上手に削ることができる」わけではなく、教師の実演に目を丸くする生徒が大多数であった。そればかりか、「手動の鉛筆削り器」の使い方がよくわからないという生徒も複数いることがわかった。

ガイダンスの時間ではこうしたごく簡単なことから指導を始めたのであるが、このようなことについての体験が新鮮に感じたようで、その後自分でも鉛筆をカッターで削る練習をしたり、うまくいかなかった描線を何度か練習して教師に見せに来たりという意欲的な行動が見られた。もともと図工の時間が好きであったという生徒も多く、中学校での学びに期待を膨らませている個人が多いと認識している。

写生会の取り組みであるが、前年度までは主題である「木」について主題構想などの事前学習を行い、当日に臨ませていた。その結果、スムーズに取り組むことができた生徒が多く、作品も技術的に一定の水準に達したものが多く出た半面、「似たような作品」が多く出てしまったように感じた。そこで今年度はあえて事前の学習を最低限度にして、現地での対象との新鮮な出会いやそこから感じる素直な感動を大事にさせ、より主体的に取り組ませたいと考えた。幸い校舎内には過去の作例が多数掲示されており、日常的に生徒の目に触れる環境が整っている。そうした作品に囲まれて1カ月を過ごした生徒が、写生会当日に現地でどのようなことを感じ、何を表現しようと思ひ、どう決定していくのかを観察したいと思っている。

(2) 題材観

本校では毎年全学年で写生会の取り組みを行っており、夏休み前までの期間を使って授業の中で制作を進めている。写生会は学年ごとに午前中の時間帯を使って盛岡城跡公園に赴いて、実質2時間程度の取り組みとして実施している。例年、当日は各学年の職員が引率にあたるほか、岩手大学教育学部の学生（今年度21名。その年に主免実習を行う学生）が実技指導に協力してくれている。また、写生会中は各学級の担任が学級の生徒の構図の写真を撮って回り、そのデータを後日出力して生徒に配付して制作の参考とさせている。このように、本校ではその日のうちに完成まで持つ「全日」の取り組みにはせず、写生会後の授業の中で指導してきた経緯がある。

また、学年ごとに異なった目標を提示して取り組ませていくことで、自分自身の成長を確認させたいと考え、第1学年では「木を主題として自分が感じた情感を生き生き表現すること」、第2学年では「画面全体の雰囲気や、奥行きのある構図で表現すること」、第3学年では学んできたことを生かして「残したい心の風景という主題で、風景描写に自分の主観を強く表現していくこと」という制作目標を定めている。このように主題が異なるので同じ場所に行っても構図を決める観点が異なり、その学年ならではの作品作

りとなっていく。また、授業では第1学年は「取り組み方を学ぶ」、第2学年では「互いに教え合ったり話し合ったりしながら取り組む」、第3学年では「自分自身で考え、決定して取り組む」というように、取り組み方にも段階を設定している。

表現するにあたっては、生徒個々がなぜその風景を選んだのかということから構想を深め、参考としての写真はあっても、画面の中に自分の感情移入を最優先させて、描くものと省くものについて明確な意思をもって取捨選択するように指導したい。

さらに、3年間を通しての取り組みであることから、2回目、3回目と、自分自身の成長を自覚できるような、取り組みの記録の充実とふり返りの工夫もしていきたいと考えている。

(3) 「学びの本質」について

自分が表したいことを目標として持ち、それを作品にどのように表現していくかを構想することが重要な活動となる。一部の生徒が参考資料の実景写真を複製する取り組みに走るのは、取り組みの初期の段階でこの目標が定まっていない故であると考えている。自分の内面に表現の目標が定めていないから、到達点を写真に求めてしまう。結果的に技巧に走って、見た目はリアルに描けていたとしても主題性の面で面白みに欠ける作品になったり、写真と自分の作品の写実性のギャップから意欲を喪失していくのである。

風景を題材にしても、どんな場所をどんな観点で選ぶか・その風景をどうトリミングするか構図を工夫すること・部分によって描き込みの度合いを変えること・色彩表現での工夫等々、作者が表現活動の着地点を自らが定めて、そこに向かって様々な工夫をしていくということが重要である。このことから、従前の作品重視の指導ではなく、よりプロセスを重視した学習計画になることは自明である。

ただし、ともすれば、思いを深めたり広げたりするほどに実際には下描きの段階から生徒は「思いと表現のギャップ」を感じ、ストレスを蓄積していく。学習活動は、まさにこれを乗り越えていくために試行錯誤しながら取り組んでいくのであるが、技術的な手だてが限られていると、越えていくことができないまま終わってしまうこともあるだろう。これでは、「色と形で思いを表現するのは限られた才能を持つ人しかできないこと」という認識を強めてしまうことにもなりかねない。

生徒が、自分に合った表現方法について、学習したことから様々な発見をし、知っていることやできることを蓄積していくこと、そうして“自分の引き出しの中身”を増やしていくことで、表現の幅が広がっていく。大事なのは制作過程で生徒自身が自信をもって自己決定していくことである。故に授業の中では生徒同士の表現や意見、感じたことなどを交流する場面を積極的に設け、相互に学んだり認め合ったりすることを通して、「自分なり」というものを自覚する契機にしていく(悪い意味での“自己流”とは異なる)。

中でも活用したいのが「ふり返りシート」である。一斉授業で示す学習課題(学習テーマ、めあて)を受けながら、生徒個々が「今日はここをがんばってみたい」というような個人課題をもって授業に臨み、その時間の振り返りが次の時間に確実につながっていくように工夫してみた。また、生徒が気付いたことを自由に記録できるような記述欄を広く取ることで、自主的に自分の取り組みを改善していく学習材料としていきたい。つまり、生徒がどのような学び方をしているかが指導者にも見える形を模索していきたいと考えている(別紙資料参照)。

3 題材の指導目標

(1) 指導目標

- ①木を主題にすることにより、身近な自然のよさや美しさに対する関心を持たせるとともに、意欲的に美術の基礎的能力を身につけていこうとする態度を養う。
- ②豊かに発想し構想する能力を育み、形や色の構成を工夫して自分らしい表現させる。
- ③形体や色の表し方など基礎的技能を身につけさせるとともに、感性や想像力を働かせて表現意図に合う多様な表現方法を工夫させる。

(2) 評価規準

美術への関心・意欲・態度	①身近な自然からよさや美しさを発見して関心を持つとともに、意欲的に美術の基礎的能力を身につけて、それを生かした表現活動に取り組んでいるか。
発想や構想の能力	②主題をもとに豊かに発想し、形や色の構成を工夫して自分らしい表現を構想しているか。
創造的な技能	③形体や色の表し方など基礎的技能を身につけ、感性や想像力を働かせて表現意図に合う多様な表現方法を工夫しているか。

4 題材の指導計画及び評価計画

時間	主な学習内容と学習活動	評価規準	評価方法
1	○ガイダンス ・写生会の取り組みについての概要を理解する (主題や当日の日程, 留意事項等について)		
2	○写生会当日の取り組み ・主体的に描きたい場所を選定し描き始めることができる。 ・木から感じたことを大事にしながら自分らしい画面構想をし, 下描きを進めることができる。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法
2	○下描きの取り組み ・当日のふり返りをもとに, 自分の主題を確認し深める。 ・表したい主題を強調するために, どのような工夫をしていきたいかを考える。 ・対象物の主従の関係を考えながら描き込みを進める。 ・全体の感じをつかむようにあたり線を効果的に使って形体を描写していく。 ・細部を確認しつつ強い線も使用して下描きを仕上げる。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法
1 本時	○彩色の構想 ・主題を表現していくための色彩表現の多様性を知り, 表したい主題から色彩の構想を進めていく。	① ②	観察法・作品法 作品法・自己評価法
5	○彩色活動 ・彩色の計画を立て, 基礎的な技能について, できることやできないこと, できるようになりたいことなどをまとめ, 今後の課題設定をする。 ・遠景から彩色していく。 ・重色や混色で色彩を深め, 主題に迫っていく。 ・完成度を高めていく。	① ② ③	観察法・作品法 観察法・作品法 作品法・自己評価法
1	○まとめる ・自分で定めた個人課題についてふり返る。 ・相互に鑑賞する。 ・取り組み全体をふり返り, まとめる。		

5 本時について

(1) 主題 「色彩表現の多様性を知り、表したい主題から色彩の構想を進めていこう」

(2) 指導目標

絵画表現の色彩構想について、既成概念にとらわれることなく色彩の持つイメージを活かしながら自由に表現して主題に迫っていこうとする。あるいはその選択肢も含めて、より自然な色合いを追究していこうとするなど、以後の制作についての方針を自己決定させる。

(3) 本時の評価規準

- ・色彩表現の多様性を知り、豊かな色彩で表現していこうという意欲を持つことができる。
- ・主題をもとに、自分らしい色彩の表現を構想することができる。

(4) 指導の構想

下描きの取り組みがある程度見通しのついた状態での本時となる。これから彩色に向かっていくにあたって、多くの生徒が技術的な不安を抱えている状態である。その不安は筆の使い方や進め方というよりも、多くの生徒の場合、単純に「实景の写真で見えているような色を画用紙に再現できるのだろうか」というものであると考えられる。

中学校1年生になると、自分の作品を客観的に見ることができるようになる生徒が増えてくる。一方で、既成の概念から「葉っぱは緑」「地面は茶色」「樹の幹も茶色」のように考え、木の種類や季節によって微妙に色合いの異なる緑の色合いや、地面の茶色と木の幹の茶色の区別がないまま彩色を進めていく生徒も多い。そしてその結果が「手本」にした写真と大きく異なっていることに、後になってから気づくのである。

1年生の段階では描画の基礎基本を大事に、ということでもよく観察して描くことや、混色・重色を使い分けての色彩表現を中心にして学習計画を立ててきた。しかしながら、主題表現を大事にさせていきたいという教師の狙いとはうらはらに、写真の複製を目標とってしまう生徒が多くなっていく傾向を強く感じてきた。技巧的ではあるがどこかで見たような作品になったり、絵具の使い方などがよく呑み込めないまま概念描きして幼稚な色彩になった自分の作品をみて嘆く、そのようなことになってしまっていたのである。そこで、より主題を大事にして、色彩的にも自由度を高めながら構想させ、自分の描きたい絵を主体的にイメージして取り組ませていくことを学習計画の軸に据えた。

本時は、多くの生徒が持っている既成の概念に介入することから始めていきたい。「葉っぱは緑ではない。赤いのもあれば黄色いのもある。」それは自然の中でも見ることができるが、それ以外の色が使われた時はどうであろうか。このことについて生徒が感じる色彩の感情効果を広く拾い上げて全体化していきたい。

これまでの授業の中で、生徒には「自分の描きたい木にどんな情感を込めていきたいか」を自覚して制作していくことを強調してきた。その結果、生徒の当日の記録プリントの記述を見ると、今回の主題である「木」に、生命感、力強さ、大きさ、季節感、歴史などの表現テーマを自己決定して下描きを進めることができた。

これらの要素を作品に豊かに表現していくには、観察も大事であるがそれ以上に、感じたことを色彩的にデフォルメしたり強調したりという、より創造的な取り組みが求められることに気づかせたい。そうして色彩の多彩な可能性に生徒自らが気づき、自分の制作に取り入れていくことができるような時間にできればと考え、本時を構想した。

(5) 本時の展開

段階	学習内容及び学習活動	時間	■学びの本質との関わり
導 入	0. 3分前学習 ・ふり返りプリントの黙読		
	1 前時のふり返り ・どんなことをがんばったか ・彩色にあたっての不安はないか ・表現したい「木の○○」		■思いを交流しあい、他者との感じ方の相違を自覚する。
	2 本時の課題把握	10	
表したい主題から色彩の構想を進めていこう			
展 開	3 気づく 数種類の異なる色相で彩色された「葉」の作例を見て気づくことを発表しあう。 ・自然に見えるのはどれだろう ・不自然に見えるのはどれだろう ・印象に残ったのはどれだろう	10	■なぜそう思ったかも説明する。 ■見る人に色彩で何かを感じさせる可能性に気づく。
	4 広げる 色彩表現の多様性を知り、表したい主題から色彩の構想を進めていこう		
	同じ構図だが色彩の異なる数点の作例から、色彩の感情効果について具体的に考え、グループで話し合う。 ・それぞれどんなイメージを受けるか ・自分のテーマに近いのはどれだろう ・友達のテーマに近いのはどれだろう ・このような色遣いをどう思うか ※途中で「自然な色合いで作られている作例」も見て、比較して考えを広げる。	15	■感じ方の共通点や多様性から、より主体的に構想を進めてよいのだということに気づく。
5 深める ・今後の自分の制作の方向を定め構想する。	5	■気づきを活かし、自分なりの根拠を持った構想をする。	
終 結	6 まとめる 学習プリントでふり返る。 ・今後の制作について構想をまとめることができたか ・次の時間の自分に向けたメッセージを考える 試してみたいことや解決したいことは何だろうか。	10	■制作上の課題を自覚化し、個々に意欲を持つ。

